

岩瀬 広報

発行責任者 須田 元大
編集責任者 中野 直人

大震災の教訓を引き継ぐ

須賀川市立第一小学校長 永瀬 功一

本校の校舎は新築4年目の新しい校舎である。廊下は広く、各学年の教室前にはオープンスペースが設けられるなど、明るく開放感があり、子ども達は元気いっぱい伸び伸びと学習している。しかし、このようなすばらしい環境で学習する以前は、プレハブの仮設校舎で不自由な生活を強いられていたこと、そして、あの震災の時には、校舎が崩れ、校庭が地割れするなどの大きな被害を経験したことを決して忘れてはいけないと思う。

校長室には、当時の様子を生々しく記録した冊子や新校舎落成までの歩みが分かる資料等が保管されている。それらを読み返してみると、当時の校長先生始め職員がどれほどご苦労されて教育に当たっていたのかが伝わってくる。そして、あの混乱の中で、1人のけが人も出さず無事避難させるとともに、全員を無事保護者に引き渡すことが出来た奇跡のような対応には本当に頭が下がる。そして、今自分が預かっている子ども達や教職員全員を同じように守らなければならないと強く感じている。



【今年の避難訓練の様子】

このような思いから、本校では行事や業間活動等を利用して、年に6回の避難訓練を実施している。火災や地震、不審者への対応に加えて、児童の引き渡し訓練や震災を考える授業の実施も継続してきている。そしてこのような機会に、安全への意識を高めることは勿論、過去の出来事から「当たり前」の日常が当たり前ではないこと、このような環境で便利に不自由なく学習や生活が出来ることのすばらしさを意識して伝えていきたいと考えている。



【震災を考える授業の様子】

現在の5・6年生は、いよいよプレハブの仮設校舎を経験した最後の学年となる。年々記憶は薄れ、今の生活が当たり前になっていくことは仕方の無いことだとは思いますが、「災害は、忘れた頃にやってくる」ことを肝に銘じ、いざというときの行動が身に付く子ども、判断に迷うことなく子ども達の命を守る教職員、管理職となれるよう、常に危機意識を高めていきたいと思っている。

雑感：「不易と流行」を再考する

小塩江小学校 佐藤和則



先日、山形県の羽黒山にある国宝「五重塔」の内部参拝をする機会を得た。明治以降、初の開扉だそうである。楽しみにしていたのは、五重塔の心柱をその目で確かめられる事であった。一階を参拝すると、片隅に心柱の一部が安置してあった。各層の部材に干渉することなく最上層の屋根の上の相輪を支える心柱は現在二層目からだが、本来は基壇上の礎石の上から立てられていた。現在の構造は、1608年に大修復したとき、心柱の底の分部が腐っていたので切り取ったと伝えられている。この2層目を仮設足場を登って、開口部から内部をのぞき込むことができた。心柱を中心に屋根を形作る骨組みが幾重にも重なり、五重塔を形成していた。組み合わせの美を感じた。この風景は、同時に心柱とは礎石の上に設置

される建造物の核心を成すべきものとの思いが否定された光景であった。

ふと「不易と流行」という言葉が脳裏に浮かんだ。さて、「不易と流行」という言葉は、芭蕉の残した言葉の中にある。

「蕉門に千歳(せんざい)不易の句、一時流行の句と云う有り。これを二つに分かつて数えたまえども、その基は一つなり。不易を知らざれば基立ちがたく、流行をわきまえざれば風(ふう)新たならず」 (去来抄)

「不変の真理を知らなければ基礎は確立せず、変化を知らなければ新たな進展がない」ということになる。ただし、「両者の根本は一つである」という考えに基づいている。また、中教審では以下のように使われている。

これからの社会の変化は、これまで我々が経験したことのない速さで、かつ大きなものとなるとの認識に立って、豊かな人間性など「時代を超えて変わらない価値のあるもの」(不易)を大切にしつつ、「時代の変化とともに変えていく必要があるもの」(流行)に的確かつ迅速に対応していくという理念の下に教育を進めていくことが重要であると考え。 (中教審 答申 社会の変化に対応する教育の在り方より)

不易とは何か。これは実は人によって大いにその捉え方が分かれるところである。

ある人は、日本の伝統的教育のよさに求め、またある人は、教育のコアな部分でありスタンダードであると捉えている。中教審では「不易」の例として、「豊かな人間性、正義感や公正さを重んじる心、自らを律しつつ、他人と協調し、他人を思いやる心、人権を尊重する心、自然を愛する心」としている。

不易と流行を論じる場合、不易をあまりに固定的なもの、絶対的なものとして不可触としてはいけないのではないか。教職員が不易についての共通認識を持てるように意思の疎通を図る必要があるのではないか。その視点として本当に不易はあるのか。あまりにも固定的に捉えていないか。本質は常に不変なのか等続ける必要があると感じる。

前述の松尾芭蕉は、俳諧上達の秘訣を聞かれ、「過去の自分に飽きることだ。」と答えたそうだ。つまり、本質的なもの「不易」を追究するためには、常に変化「流行」をしていかねばならないのであり、変化する(流行を追う)場合も本質的なもの(不易)を踏まえていかねばならないとしている。

一日の始まり
～仁井田小の「凡事徹底」～

須賀川市立仁井田小学校長 池上 雅

登校指導からの帰り道、聴こえてくるのはさわやかな小鳥のさえずり、子どもたちの登校を喜んでいるかのような力エルの鳴き声。校舎は、札幌の時計台を彷彿とさせる赤い屋根の時計台が特徴的で、遠方からでもはっきりと仁井田小学校とわかります。区画整理によるのか、広い水田に囲まれた、自然豊かな懐かしさを感じさせてくれる学校に赴任することができ、うれしく思います。



一日の始まりは、特に引継ぎをしていないにもかかわらず、前任者とほぼ同じようになっています。

朝7時35分。「交通安全」と胸にロゴが入った黄色のジャンパーを着て、横断旗を手に校長室を出る。向かうは精米機前の歩道。(略)いつも最初に登校してくる通学班の子どもたちとの会話から街頭指導がスタートする。(略)続々と登校してくる子どもたちを迎える。(略)その後、校庭に向かい、委員会の活動で石拾いをしてきていたり、校旗等を掲揚してくれたりしている高学年の子どもたちに「いつもありがとうございます。とても助かるよ。」と声をかけ、8時10分。子どもたちが教室に戻り、朝の活動を始める。(略)

岩瀬地区に赴任して2か月が経過しようとしています。

前任校と比べ20倍強の児童数、3倍の教職員数とあって、初めは戸惑いや不安もありました。それを取り除いてくれたのは、朝の子どもたちの元気な挨拶です。「校長先生、おはようございます。」子どもたちの朝の挨拶は、実にすがすがしく、一日の仕事のスタートの源となっています。

本校は、「意欲をもって学び、心もからだも健康な子ども」を教育目標に掲げ、挨拶、返事、靴を揃えるなど、当たり前のことが当たり前にできるようにする繰り返しの指導、凡事徹底を重点事項として取り組んでいます。

これまでの積み重ねが朝の子どもたちの挨拶であり、昇降口の靴箱の靴です。とても気持ちのいいものであり、今日も落ち着いて学校生活をスタートさせることができると安心することができます。



今後も、これまでの仁井田小学校の取り組みを守り続け、意欲をもって学び、心もからだも健康な子どもの育成に努めていきたいと考えています。

岩瀬地区での学校勤務が初めての中、校長先生方には温かくお声掛けいただき、感謝しております。岩瀬地区の校長先生方からご指導・ご助言をいただきながら努力していきます。

「人生で大切なことをヒーローが教えてくれた」

須賀川市立柏城小学校長 熊田順一郎

道徳の授業研究会に過去に参加した時、ある大学講師が現在の子どもたちに**不易の価値の教育が欠如**していることを訴え、これから力を入れていかなければならない価値として「**規範意識、思いやりの心、生命尊重、努力・忍耐**」等を挙げていた。また新学習指導要領の改訂の柱の1つには「**人間性の涵養**」が挙げられており、さらに「**管理職の道徳授業への参加**」が指導要領にも明記される中、児童の道徳性の育成に一層努力していかなければならないと感じる。そんな中、ふと自分のことを考えてみた。

「子どもの頃、人生で大切なことは何から学び、影響が大きかったものは自分にとって何だろう」

学校生活、家庭でのしつけはもちろんではあるが、自分にとってはテレビ番組、特に大好きだった特撮・アニメヒーローの影響が大きかったように思う。

子ども時代、現在のスマホのように「テレビの見過ぎ」が問題視され、学校でも視聴時間の調査があったことを覚えている。それでもあの時代、現在のような録画機器は皆無であり、番組を見逃せばもうおしまいである。新聞のテレビ欄を穴の空くほど見つめる毎日だった。そして現在は考えられないが、毎日ゴールデンタイムに何かしらの特撮やアニメが放映されていた時代だった。(以下、大好きだった、自分に影響を与えたと思われる番組とエピソードの一部を列記する。)

○ タイガーマスク

自分の素性を隠し、全国の恵まれない子どもたちのため、子どもたちに正しく生きることを伝えるために戦うことを誓ったタイガーマスク=伊達直人。私にとって、強烈に影響を受けたヒーロー番組の原点(後にプロレスの魅力にも、のめり込むこととなった。)次々襲い来る「虎の穴」の刺客たちを撃退していくその姿、愛、友情に当時私は魅了された。そして、伊達直人の意志を引き継ぐような近年のタイガーマスク現象、この番組に大きな影響を受けた私のような大人「伊達直人」が全国に多数存在する。

○ 帰ってきたウルトラマン

ウルトラシリーズの中でも世代的には「新マン」(現在はジャックと呼ぶが)である。最終回のウルトラ5つの誓いが印象深い。この誓いは主人公、郷秀樹が地球を去る直前、次郎に教えた誓いの言葉だ。その5つを要約すると「空腹のまま登校しない、天気の良い日は布団を干す、道を歩くときは車に注意、他人の力を頼りにしない、はだしで走り回って遊ぶ」である。当時の私には祖父母の教えのように感じた。正直、守ろうとしたが難しかった(なかなか守れないからウルトラなのか?)ことを記憶している。(ちなみに地球を去る「新マン」を見送った自分が、「ウルトラマンメビウス」の中で、この誓いを30年の時を超えて再び耳にすると夢にも思わなかった。さらに誓いが「礼儀を守る、目上の人を敬う、好き嫌いをせず食べる、弱者に手を差し伸べる、困難に立ち向かう勇気を持つ」という現代的課題に変更されていることには驚いたが、なぜかうれしかった。)

○ 仮面ライダー

世界平和と仲間のために戦う仮面ライダーに憧れた。年に数回あった1号2号がそろって登場するダブルライダー編は大イベントで、その都度に我々は早々に友達との遊びを切り上げて自宅に帰り、夕食もさっさと平らげテレビの前で正座して彼らの登場を待ち構えた。(正座をして番組を見た記憶はこの時と「猪木・アリ戦」のみ)人気絶頂期には、ライダーキックをまねをした子どもたちがけがをするという事故が全国で続発し社会問題になったが、これを受け本郷猛(1号ライダー)が画面から子どもたちに注意を促すと、翌日から事故は激減した。

○ がんばれロボコン

「人に役立つ」ロボットを目指してのロボコンのがんばり=ロボ根性はピント外れの時もあり失敗ばかりだが、持ち前の根性と努力、厚い人情でがんばっていく。当時の私はそんなロボコンに自分の姿を投影していた。失敗を積み重ねながらも一生懸命目的に向かって頑張り、最後、ロボコンは一番優秀なロボットとガンツ先生に認定される。たゆみない努力と多くの貢献、さらに仲間との協力や人々との触れ合いを通じて、様々な経験を積み重ねていくことの大切さをロボコンは教えてくれた。また「ロボコン0点」の名ぜりふが印象的なガンツ先生。当時はとても厳しいと感じていたが、ロボコンに対して意外と優しい面も持っていた。一番手のかかるロボットだから、他よりも余計に気遣っていたように見えた。そう考えると厳しさ、優しさ、思いやりを兼ね備えた先生だったと言えると思う。教師である今、見習うべき存在でもある。

あの頃であれ現在であれ、ずっと変わらない不易の価値がある。それは小さいころに知っておくことが大切である。そんな大切なことを私はヒーローから教わった。あの頃の子どもは、子どもながらにこの良し悪しの分別がついていたと確信している。特撮やアニメだからこそ道徳的価値が子どもの心にすんなりと入ってきたのではないか。(今のアニメは難解すぎる)今回、昭和のテレビから受けた影響の大きさを改めて実感し、子どもの頃を懐かしんだ。今後も当時の気持ちを忘れず、またこれらの番組のよさも伝えながら、子どもたちの教育に携わっていきたい。

地 域 と と も に

須賀川市立大森小学校長 佐藤 浩行

大森小学校に着任して半年が経ちました。その中で、大森小学校が保護者の皆様をはじめ、地域の方々に支えられ、充実した教育活動を進めることができているのだということを強く感じています。

◇ 子どもたちの安心・安全のために

本校では、ほとんどの児童が朝は徒歩通学ですが、学区の真ん中を通る県道には歩道が十分整備されていません。そのような中、登校班できちんと一列に並び、車に注意しながら通学する子どもたちの姿が見られます。学区内の危険箇所（交通面も含む）には、「大森小学校PTA」と書かれた注意を促す手作りの看板が、数多く設置されています。学校近くの横断歩道には、毎朝、地域の交通教育専門員の方が立ち、子どもたちの安全を見守ってくださっています。また、地区内の各団体の代表が集まり、子どもたちの安全などについて意見を交わす「大森の子どもを育てる会」が年に一度開かれます。このような地域と一体となった取組が、子どもたちの安心・安全を支えています。



◇ 子どもたちの学習・体験活動の充実へ向けて



下学年では、学区内の施設等に出向いて学習させていただく機会が多くあります。3年社会科の農家見学では、キュウリ農家を訪問してその仕事について教えていただきました。農家の方は手作りの図やグラフなどを準備して、わかりやすく説明してくださいました。学校支援ボランティアには8名の方が登録して、農園活動の補助や読書環境の整備等に積極的に取り組んでくださっています。老人クラブの方々との交流も盛んで、旧校舎にある花壇の花苗植えの活動、昔遊びなどを中心としたふれあいタイムを実施し、交流を深めています。

◇ 地域の誇り・伝統を受け継ぐ

学校のすぐ南東に、戦国時代の城跡である木舟城があります。今から15年ほど前、当時の区長さんが中心となり地域活性化のために整備が始まりました。10年前には、県の補助を受けてイルミネーションを設置し、本校児童に名称を募集して「きらら木舟城」と命名されました。その後、地域の方々が整備を続け、学校でも看板設置などの活動を行って関わり続けてきました。しかし、最近では経年劣化から何枚かの看板



が外れ、残りも劣化が激しくなっていました。そこで、今年度、市の「特色ある学校づくりサポート事業」を活用して新しい看板を設置することになりました。看板の制作は学校が行い、全校生できれいに色を塗りました。設置は子どもたちには難しいため、区の役員の皆様の協力を得て行いました。地域のシンボルとして形に残るものを作り上げた喜びは、子どもたちの心に深く刻み込まれるものと思います。

子どもたちは地域の大切な宝物です。学校と地域が連携し、一体となって子どもたちを育てていくことが、この大森地区では脈々と受け継がれてきています。それを途切れさせることなく、ふるさとを愛する心豊かな子どもたちを育てていきたいと考えます。

「小中一貫教育校になりますから」

須賀川市立長沼東小学校長 安田 柳一

教頭として、最初に赴任したのが南会津地区の檜枝岐村立檜枝岐中学校でした。皆さんもご存知の通り豪雪地帯であり、檜枝岐歌舞伎には多くの観光客が訪れ、日本百名山の燧ヶ岳や会津駒ヶ岳がそびえるような山間部にある学校です。



最初に当時の校長や小学校の教頭に言われたのが「檜枝岐小中学校は、小中一貫教育校になりますから。」という言葉でした。それから小中一貫教育を進めるために隣接していた小学校と中学校の校舎をつなげ、職員室を一つにするなど引っ越し作業が始まります。もちろん同時進行で教育システムも変えていきました。日課表を合わせたり、会議の日程や内容を決めたり。もともと校歌も小中同じで、運動会や文化祭も一緒にやっていたので、スムーズに小中一貫教育が推進できるかと思いましたが、そんなことはありません。一番のネックは教職員の隔たりです。「自分は小学校だから。」「中学校は小学校とは違うから。」というお互いに壁を作っていたことです。さらに檜枝岐村に来る先生は、私を含め他地区から赴任する先生が多く、地元出身者はほとんどいませんし、転勤してきた先生方も2、3年で戻っていきます。そんな中で学校を変えていこうという意識はなかなか生まれません。

よく言われるように、小学校と中学校には「文化の違い」はあります。それは子ども達の発達段階に合わせた指導方法の違いですから、あって当たり前です。それを理解した上で、同じ子どもを9年間を見通しながら、教育していくのが小中一貫教育です。先生方の意識を少しでも変えるためには、やはり話し合いしかないように思います。学校ばかりではなく、夜、お酒を飲みながらいろんな話をしたのを覚えています。先進校視察にも自分でも行きましたし、先生方にも行ってもらっていました。それから中学校教員の小学校への乗り入れや小中教員のTTの授業などを進めるようになり、なんとか小中一貫教育を推進することができるようになりました。

その後、須賀川市立稲田中学校に赴任することになります。当時の校長に言われたのが、「須賀川市は小中一貫教育を推進するようになった。稲田は施設一体型の小中一貫教育校になるから。」「?!」その後、さまざまな方々の協力を得ながら、平成30年度に須賀川市立小中一貫教育校稲田学園が開校することができました。

今年度、須賀川市立長沼東小学校に校長として赴任しました。小学校に勤務するのは初めてですが、今までの経験を生かし、皆様のご指導を受けながら、学校経営にあたっていきたいと思っております。よろしくお願いいたします。

「学び続ける姿を大切に」

須賀川市立白方小学校長 星 峰夫

本校に着任して3ヶ月あまり、学校や地域を知り、慣れてくるごとに子どもたちや職員、保護者、地域の方々の良さがじわじわと伝わってくるのを実感する日々です。

その一つが、先生方の授業に対する前向きな姿です。ベテラン・若手の別なく率先して授業を公開、提供してくれます。中でも、私の心に響いたのが、採用4年目の先生の言葉でした。4月、今年度の様々な研修案内が学校に寄せられた際、「私は、まだまだ授業も学級経営も自信がないので、



〈1年 生活科 小中一貫教育授業研究会〉

ぜひ今年度もジャンプアップ研修に参加させてください。」という申し出でした。もちろん私は喜んでその申し出を受けました。他にも、これまで小中一貫教育における授業研究会や現職教育に伴う授業研究会等がありましたが、いずれの場合も率先して授業に取り組む先生方のお陰で、実り多い機会となりました。



〈2年 算数科 ジャンプアップ研修授業〉

先生方の「学び続ける姿」は、様々な面にその成果をもたらしてくれます。まずは教員の指導力の向上です。新学習指導要領では、これまでのような、教員が「何を教えるか」ということから、子どもの視点に立ち「何ができるようになるか」を重要視しています。学び続ける姿があれば、身に付けた知識・技能と柔軟な発想力を駆使して、「何ができるようになるか」の指導（子どもたちが何を学ぶか、どのように学ぶか）がきっと展開できます。また、継続的に積み重ねることで子どもたちの学び方にも変化が表れ、「主体的・対話的で深い学び」が身に付いていくものと考えます。そしてさらには、学級から学校全体へ、家庭・地域へと学び続けることの良さが広がりを見せていくことと思います。

教員にとって何といたっても授業は大切なものです。その大切な授業に磨きをかけるには、指導における理論と実践の両輪が欠かせません。私は、そのことを本校の先生方の学び続けている姿を通して、改めて教えられました。これからも、「学び続ける姿」を私自身も含め、職員全員で大切にしていきたいと思っています。



〈6年 社会科 現職教育授業研究〉

東京オリンピック

須賀川市立白江小学校長 川崎 勝久

2020東京オリンピックまであと1年たらず。(退職までは半年あまり)現在(9月24日現在)、ラグビーワールドカップ(日本の初戦、対ロシアは見事だった)、ワールドカップバレー(がんばれ!日本)とスポーツイベントが目白押しであり、この後の世界陸上等々、スポーツ好きにはたまらない。しかし、私の一押しは、NHK大河ドラマ『いだてん〜東京オリムピック噺〜』だ。残念ながら、大河ドラマ史上最低の視聴率とも言われているが、来年の東京オリンピックを前に、ぜひ見てほしい番組なのだ。

教科書や年表では知っているが、実際には目にしたことのないオリンピックや選手の姿を、当時の映像を織り込みながら、今が旬の役者たちが見事に演じきっている。9月22日の回では、「前畑がんばれ!」でおなじみの前畑秀子(上白石萌歌)が、前回ロサンゼルス大会の銀メダルの呪縛を晴らすべく奮闘する姿、「前畑がんばれ!」と絶叫するアナウンサー、ラジオを聞きながら声をからして応援する国民の姿は感動的だった。同様の感動は、それぞれの大会でも見られ、アムステルダム大会、日本人女子初のメダリスト人見絹枝(菅原小春)の走りや台詞は涙もので、ぜひご覧いただきたい。

日本で初めてオリンピックに参加した男 金栗四三(中村勘九郎)と日本にオリンピックを招致した男 田畑誠治(阿部サダヲ)の二人が主人公であるが、NO1の存在感を示しているのが、嘉納治五郎(役所広司)だ。

講道館柔道の創始者ということは知っていたが、「日本スポーツの父」と呼ばれ、アジア初のIOC委員として、日本のオリンピック初出場のために奮闘し、選手団団長として参加していたことは、恥ずかしながら知らなかった。

役所広司の演技もあり、人並み外れた情熱とひょうひょうとしたユーモアをあわせもつ大人物としての嘉納治五郎が魅力的に映る。

嘉納は、日本初のオリンピック予選会の開催、オリンピック開催のための神宮外苑競技場の建設、東京オリンピック招致のためにIOC会長ラトゥールを招いての「おもてなし」等々、夢の実現に向けて無理と思われることにチーム一丸で邁進していく。その想像力と実行力、そして周囲の人を引きつける人間性にリーダーとしての器の大きさを感じる。(かくありたい!)

1940年の東京オリンピックを前に嘉納治五郎は亡くなり、第2次世界大戦により東京オリンピックの開催は幻となってしまふ。その意志を継ぐ田畑誠治が、新たなオリンピック招致に向けてどんな活躍を見せるのかが今後の見所だ。個人的には、1960年東京オリンピックでマラソン銅メダルの円谷幸吉選手をだれが演じるのかも気付きである。(ちなみに、フジヤマのトビウオと呼ばれた古橋廣之進選手を、あの北島康介が演じる) 敬称略



働き方改革の実現に向けて

鏡石町立第一小学校長 服部 秀夫

今年度より岩瀬地区小・中学校長会でお世話になっています。前任校は猪苗代町立緑小学校でしたので、北会津地区で様々な勉強をさせていただきました。岩瀬地区は地元ですので、様々な校長先生や諸先生方から声をかけていただいているのでとても心強い限りです。自分自身が岩瀬地区の校長としてどのくらい貢献できるのか分かりませんが精一杯頑張っており組みたいと思いますので、今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

さて、今回のテーマである学校経営や本校の課題について述べさせていただきます。どの学校もそうであるように、本校の教職員もとても一生懸命に教育活動を行っていただいています。その中であって、働き方改革は有名無実、または遅々として進まない状況にあります。校長として何が出来るのかをいつも模索しています。当たり前ですが、ゆとりある時間が生み出せれば、教職員も疲弊せず、子供達も落ち着いて学習に取り組めることと思います。しかし本校の現状は、通常の授業時数に加え、放課後クラブ（いわゆる特設）があり、週休日や夏休みも取り組んでいます。その他学校行事に地域の行事があり、その対応で慌ただしい日々を過ごしています。その中には、生徒指導をはじめ様々な対応もあり、気の休まる日は少ない状況です。そんな状態では、先生方のパフォーマンスは上がるはずありません。どうすればいいのか…

私自身が考えているのは以下のような働き方改革を進めることです。

- ① 年間計画をワークショップ型にして全職員で改善できるものを話し合うことです。難しい課題ですが、行事の見直し・会議の精選・家庭訪問の在り方などを裏付ける理由を元に検討することです。
- ② 放課後クラブについて検討します。今年度同様に週3日の練習日とし、指導に当たるのは、そのうちの2日とし負担を均等化します。一人一人が責任を持てるものになるよう考えています。また、今年度同様、学年主任は放課後クラブを担当しないようにしたいと思います。
- ③ 4年生以上の出分科の時間を4時間にしたいと考えています。実情では、大規模校ということもあり、復興加配と主幹の補充があります。それを生かして工夫したいと思っています。空き時間を作ることで勤務時間の中で校務等が効率よく進められて行くようにしたいと思います。

退勤時は16時45分と決まっていますが、その時間で退勤できる職員はあまりいません。本校は18時30分に完全施錠できるよう推進していますが、なかなかその通りにもいきません。仕事が終わらないのです。現状では、勤務時間の中で時間をどう生み出していくかが大切です。そしてその生み出した分だけ、求められている働き方改革に近づいていくと考えています。仕方がないと諦めては何も解決しないので、何とか挑戦したいと思っています。



「けやきの生命力」

天栄村立大里小学校長 野崎 浩二

大里小の校庭南西の遊具側に、歴史を感じさせる立派なけやきの木がそびえ立っております。多くの大里小の卒業生の成長を、そして子ども達の喜怒哀楽を見聞きしたであろうと想像できる、太い幹を要する大きな大きなけやきの木です。そんなけやきの木の枝を太い幹と枝だけを残して、一昨年秋に思い切って用務員さんの力をお借りし枝打ちをしました。見るからに何もなくなり、もしや枯れてしまうのではと不安を感じるほどに枝打ちをしました。

ところが新緑の季節を迎えた今年の5月、けやきの幹の先端をふと見てみると、あちらこちらから次々と新芽を出し、二年を経過しようとしている今では、けやき全体を、枝振りもよく大きな大きな葉が覆っているではありませんか。「何とすごい生命力」と正直驚き、安堵しているところです。



私は、大里小の子ども達も、けやきの木のように、たくましく・力強く、大地に根を張って立ち足る困難を乗り越えて、自分の未来を切り拓いて行って欲しいと願いつつ、先生方のお力添えをいただきながら、これまで日々の教育活動



に誠心誠意あたってまいりました。しかし、中々思うように成果を出せずにいることに、自分の力不足を痛感している毎日です。

引き続き、大里小の良き伝統を守りそしてつなぎつつ、大里小だからこそできる大里小ならではの特色ある教育を、さらに前進させるべく、保護者・地域の皆様の絶大なるご支援とご協力を賜り、村当局のご支援ご指導を頂戴しながら、子どもたちの瞳の輝きを曇らせることのないよう、さらなる進化（深化）を図り、より高みを目指して努力してまいります。

「その子にしかない その子の光」を見つけること

天栄村立牧本小学校長 武藤賢一郎

どの子も 子どもは星
みんなそれぞれが それぞれの光をいただいて まばたきしている
ぼくの光を見てくださいと まばたきしている
わたしの光も見てくださいと まばたきしている
光を見てやろう まばたきに答えてやろう
光を見てもらえないと 子どもの星は光を消す まばたきをやめる
まばたきをやめてしまおうとしはじめている星はないか
光を消してしまおうとしはじめている星はないか
光を見てやろう まばたきに答えてやろう
そして やんちゃ者からはやんちゃの光 おとなしい子からはおとなしい子の光
気のはやい子からは気のはやい子の光 ゆっくり屋さんからはゆっくり屋さんの光
男の子からは男の子の光 女の子からは女の子の光
天いっぱい 子ども星を 輝かせよう



これは、私が教師として最も大切にしている詩の一つだ。新採用の時に、先輩からもらった本の中にあつた。作者は、東井義雄さん。兵庫県の教師をしていた方だ。「いつか、こんな教師になりたい。いつか、こんな学校をつくってみたい。」そう思った。

そうこうしているうちに30年が過ぎ、校長として初めて牧本小学校に赴任した。「この詩のような学校をつくろう。」熱い思いをもって、子どもたちと対面した。しかし…。

「ガーン！」突然頭を殴られたような衝撃だった。とても落ち着きがない学年があつたのだ。なかなか教室に入らない。授業中に出歩く。「うるせえ！」先生に対しても容赦なく暴言がとぶ。校長の私が注意しても、全く聞かない。「私は、この子どもたちの中に、『光』を見つけることができるのか？ 本当にできるのか？」初めて出会った現実に、困惑した。

しかし、「この子たちの中にも、きっと『光』があるはず！」そう信じて、全職員で「光」を見つけようと努力した。「あいさつをしてくれて、ありがとう！」当たり前のことにも、みんなで感謝した。「教室に入るの早くなったね。」ほんのちょっとした成長もいちいちほめた。担任のA先生は、毎日、子どもたちのよいところやがんばりを黒板に書いてから退勤した。学年だよりや学校だよりも、子どもたちの頑張りをたくさん載せた。

すると、やんちゃな子どもたちの中にあつた「光」が、少しずつ輝きだした。

6月のプール清掃。授業中だけでは終わらず、放課後、先生方で仕上げをしていた。すると、その子たちがやって来た。「おれたちも、やりてえ」そう言って手伝ってくれた。汚い水の中に入り、上半身もびしょぬれになりながら、1時間以上も手伝ってくれた。「あなたたちは、働き者だねえ。ありがとう！」無意識にこの言葉が出ていた。

持久走記録会。このクラスには、体の関係で、走るのに他の子どもの2倍も3倍も時間がかかるB君がいる。今回も、まだ一人だけゴールしていなかった。ゴールまで残り200mくらいになった頃だろうか。突然、何人かの子どもたちがB君の方へ走っていった。あのやんちゃな子どもたちだ。B君の後ろを「がんばれ！がんばれ！」と励ましながら、ゴールまで一緒に走ってくれた。みんな笑顔だった。「あつた。やっぱりあつた。これが、あの子たちの『光』なんだ。」涙がこぼれた。担任のA先生も泣いていた。

今でも、まだまだ大変である。しかし、このやんちゃな子どもたちの「光」が、少しずつ、少しずつ強くなってきた。そして、この子どもたちと出会いが、私の校長としての「使命」をより一層鮮明にしてくれた。それは、

どの子の中にも、その子にしかない、その子の光を見つけ、より輝かせること。

そういう私自身、子どもの時、そして教師になってからも、私の中にあるほんのわずかな「光」を先生や先輩たちに、大切に大切にしてもらってきた。初めて勤務したこの岩瀬地区でも、先輩の校長先生方をはじめたくさんの方々に温かく接していただいている。そのありがたさを決して忘れず、これからも自分の「使命」を全うできるよう努力していきたい。

優しい時間

天栄村立湯本小学校長 中野 直人

「今はこんなに山奥に来て涙していると思いますが、ここを去るときには、もっと涙を流していることでしょう。」3年前、PTA歓迎会でPTA会長の星健治さんがあいさつで述べた言葉です。私にとって湯本での3年目も、時間がゆっくりと流れています。

教員住宅にいる時間、とても静かです。目の前にある河内川の流れの「サー」という音がするくらいです。夕方の家事（食事、洗濯等）を終え、読書をしていると時間を忘れてしまいそうです。また、住宅の間には外灯があり、寝るときも部屋の中がうっすらと明るく、臆病な私にとってはほどよい明るさです。夏場は、明るくなる朝方4時頃から、鳥の鳴き声がします。でも、冬場などは特に、雪の上に動物（ハクビシン？）の糞が落ちているので、住宅の周りを獣が静かに歩き回っているようです。

学校にいる時間も静かです。時々、一人の幼稚園児の元気の良い歌声や1年生が担任の先生を呼ぶ声が聞こえるくらいです。ノーチャイムなので、せかさされるような時間の感覚もありません。なので、時計を見ながら、自分でタイムマネジメントをしないとあっという間に1日が過ぎてしまいます。今年度から、子どもたちの対話力を高めるために、“p4c”（子どものための哲学対話）を朝の30分の時間に行っています。子どもたちの日頃思っている素朴な疑問が「問い」となり、一人一人が自分の考えを話していきます。

1年生も2年生も6年生も学年関係なく、その時のひらめきで自分なりの答えを見つけていきます。じっくりと考え、ゆっくりと話し、じっと聞く…。沈黙の時間も少なくありませんが、誰一人として急がせることはしません。この時間もまた、一人一人を大切にしている時間です。



温泉のある旅館を学校やPTAの会合でよく利用します。時間があるときは、まずお風呂に入らせていただきます。宿ごとに違いのある温泉は最高です。その後の一杯も更に最高



です。飲み放題で、季節や土地のものを生かしたたっぷりの料理をいただいて五千元。個人的に家族でゴールデンウィークに一泊したときも、ハイシーズンにもかかわらず二食付きで一万円でした。どの旅館も家族経営で、温かく、のんびりとした時間を過ごすことができます。この時間を楽しむことこそが、多くのリピーターの魅力の一つなのでしょう。

2年だと思っていたら、3年目に突入して3ヶ月。毎年違う季節の移り変わりを楽しみながら、8名の小学生、1名の幼稚園児、11名の幼稚園・小学校教員と共に、「優しい時間」を過ごしています。この時間を継続するためにも、今後も「幸福感」を高めるマネジメントに勤しんでいきたいと思っています。